

## 解 答

□

- (1) いのち (2) イ  
 (3) I すべてのもの II ゆずり受け III 幸福

(4) エ

□

- (1) ほんのりと柔らかい (2) じか  
 (3) ① 短〔気〕 ② 性〔急〕 (4) ア  
 (5) エ (6) 土地の恩 (7) 私の父  
 (8) まがっ〔て〕 (9) 住んでいる土地

□

- (1) ① ア ② イ (2) すべての～ならない〔から〕  
 (3) 創造 (4) ③ ア ④ オ  
 (5) イ (6) エ  
 (7) ① 悪いときめてしまう ② 人間の頭を  
 (8) リっしんべん (9) I 危険 II 専念 III 困〔る〕

□

- (1) 妃がこの家にきていっしょに住むことになったから。  
 (2) ① せ〔か〕せ〔か〕 ② 〔ど〕ぎ〔ま〕ぎ (3) イ  
 (4) ① I イ ② II 義務 III 責任 ③ IV 一生懸命 ④ V エ

## 解 説

一 出典は、河合醇著「ゆずり葉」。

- (1) 古い葉が落ちて新しい葉が出来るのは、古い葉が新しい葉に「いのち」をゆずったから。  
 (2) 「ひとりでに」は、なにもしないのに自然に、の意であるが、前の行の「気が付かないけれど」と合わせて考えると、ここでは「気づかないうちにいつの間にか」の意味。「いのちは延びる」は「命はのびていく=成長」の意。  
 (3) 第二・三・四連の内容をおさえること。ゆずり葉の木の新しい葉が古い葉からいのちをゆずられるように、子供たちは世のお父さん、お母さんたちからすべてのものをゆずられるというのである。そして、そのような子供たちに作者は「幸福なる子供たちよ」と呼びかけている。

二 出典は、幸田文『ふるさと隅田川』一川と山のにおい一。

- (1) 桜もちの葉のにおいではなく、木についている若葉のにおいのこと。第三段落にくわしく書かれているが、「ほんのりと柔らかい」「生き生きした」「定めがたくうする」などと表現されているが、どんな感じの「におい」かいちばん具体的にわかるのは、「ほんのりと柔らかい」。  
 (2) 木についているなまの葉っぱから、ダイレクトに（直接）匂ってくるにおいのこと。  
 (6) 第二段落の冒頭に「土地の恩のおかげで私は、桜の葉のにおいを知っている」とあるのに着目。桜の名所として知られていた土地にうまれ、多くの桜に接し、さまざまな時期の桜を見て育ったおかげで知ったのである。  
 (9) 「通りすがりの土地」は、たまたまそこを通った土地。それに対応するのは、いつもそこにいる土地、そこに住んでいる土地。

三 出典は、外山滋比古『思考の整理学』一整理一。

- (2) 新しいことを考えるにしても、知識がゼロの（すべてのものをしてしまった）状態から考えることはできない。  
 (4) 倉庫の整理は、必要なときに必要なものを取り出せるようにわかりやすくしてしまっておくこと、工場の整理は、邪魔になるものをなくし作業しやすいようにすること。  
 (6) 人間の頭を知的工場（=新しいことを考え出す工場）にしていく、つまりコンピューターではなく人間にしかできないことをすすめていこうとする社会を作っていく方向である。  
 (7) 「偏見」は、かたよったものの見方、まちがった考え方のこと。筆者は、人間の頭脳を知識を蓄積する倉庫のようなものと考えて忘れるとは悪いこと、忘れてはいけない、してきたこれまでの考え方を批判し、人間の頭を知的工場として能率よくしようと思えば、不必要なものは整理し（=忘れ）なくてはならないと主張している。

四 出典は、エレナ・ポーター 村岡花子訳『少女パレアナ』。

- (1) 落ち着いているパレー嬢がせきこむほどあわてているからには、いつもとは違う何かが起こったはず。パレー嬢の「わたしの姫のパレアナ・フィテアという子がここへきていっしょに住むようになったのだよ」という言葉に着

目し、制限字数内でまとめること。

- (3) 「そんな願いは持ち合わせてもいいがね」という言葉や落ち着いているというのがミス・パレーの自慢であることから、姪を引き取って家のなかがにぎやかになるのは彼女にとって好ましからざることをおさえる。
- (4) ①「わたしが呼んだら……聞いてもらいたいね」というパレー嬢の言葉から考える。返事はしたのでエは不適。  
②・③ 末尾の二段落の「ナンシーは一生懸命でした……子供をなんとかして暖かく迎える用意をしておくのが自分の責任のように感じた」という部分や、「自分の義務は心得ている」というミス・パレーの言葉から考える。